

巻頭言

終戦の雲

杉山英俊

夜空に瞬く星を繋げて星座を考えた先人の想像力には感心するばかりですが、同じ空に浮かぶ雲は、私のように想像力の乏しい者にも様々な形を見せてくれます。綿菓子やソフトクリームを始め、ウサギが少しずつ像に変わっていったり、魚の群れが悠々と泳いでいく様子は、子どもでなくてもいつまでも見ていられます。実在するのも以外にも、巨大な妖怪や神様の姿を思い浮かべることができます。夕焼けに浮かぶ細長い雲は、金色の龍のシルエットになり、月夜に地面からわき出した大きな雲は、空を支える「いだら法師」のようです。

78年前の終戦の日、関西では玉音放送の時は大変良い天気で、午後には夕立が降ったそうです。その日の入道雲は人々の心にどんな風に映ったのでしょうか。侵攻してくるアメリカ軍に対する不安で、巨大な妖怪に見えたのでしょうか。それとも、長かった戦争を洗い流す龍神様でしょうか。戦争を知らない私にはただ想像するしかないのですが、いずれにしても、その日の空は疲れ果てた日本人にとって忘れられないものになったのではないのでしょうか。

第二次世界大戦が終わった後も、世界のどこかでは常に戦争をしています。数年前まで核軍縮の動きが多少なりともあったように思うのですが、それでも独裁国が他国との交渉の道具として核兵器開発を続け、その脅威はいつの時代も影を落としています。特にここ最近、ロシアがウクライナに対して「核兵器を使う事も選択肢の一つ」とあからさまに警告したり、軍縮とは正反対の動きが目立っているようです。彼らには、キノコ形の雲が何に見えているのでしょうか。権力を拡大し、他国を従わせる雷神でしょうか。しかしこの雷神は決して飼いや馴らすことはできず、一度使われると次々増殖して、またたく間に世界中を喰らいつくすことは誰もがわかっていると思うのですが。唯一キノコ雲を見た国の国民として、この雲だけは、世界中のどこにも二度と現れないでほしいと、強く願う終戦記念日でした。



街歩きで一句

- ① 古き良き 建物めぐる 街歩き
- ② 木々の中 歴史感じる 古建築
- ③ 風情ある 昔の建物 夢記憶
- ④ 穏やかな 古刹の境内 紅葉舞う
- ⑤ 屋根瓦 重ねし歴史の 証しなり
- ⑥ 古都の街 古い歴史が 語る唄
- ⑦ 土堀に描く 春の花々 鮮やかに
- ⑧ 夏の風 涼を感じて 心地よく
- ⑨ 梅雨の音 古井戸の水と 響き合う
- ⑩ 寒い夜 囲炉裏のぬくもり ほっこりと
- ⑪ 門松で 新春迎える 伝統家屋
- ⑫ 縁側で 季節を眺める 静寂の時間
- ⑬ 日本史の 足跡残す 尊き建物
- ⑭ 茅葺の 屋根に風吹き 心落ち着く
- ⑮ 雪が舞う 塔の姿は 幻想的なり
- ⑯ 京の夜 建物照らす 雅な風情
- ⑰ 石畳 足に感じる 歴史の重み
- ⑱ 軒先に 小鳥鳴きかう 安らぎの時
- ⑲ 春の夜に お堂の光が 和を伝え
- ⑳ 風雅なる 古刹の鐘の 音しみる



年を重ねて思うこと

1. 何をするにも 体が資本
2. 元気があれば 何でもできる
3. 出会いは宝
4. 気の合う人も宝
5. 経験は資産
6. やりすぎたツケは後から来る
7. やらなかったツケも後から来る
8. やりたい事をやって後悔はない
9. 感謝と好意を伝えていないことが後悔になる
10. 身近な幸せに気づかないことは最大の不幸
11. 夢中は最強
12. 自分の機嫌は自分でとるもの
13. 不機嫌は無言の攻撃
14. 一生学び続けるもの
15. 何歳でも遅いことは全くない

長生きでね!

近江・大津に“芭蕉の足跡”を辿る！

令和5年11月29日(水)

案内人: 牧 彰(会員)

＜幻住庵＞ 先ず頼む 椎の木も有り 夏木立

「石山の奥、岩間の後ろに山あり、国分山といふ……」で始まる『幻住庵記』は、松尾芭蕉のここでの庵住の生活の中から生まれた。

『奥の細道』の旅の翌年の元禄3年(1690)4月6日から7月23日までの約4カ月の間、芭蕉は近江の門人で膳所藩士・菅沼外記定常(曲水)の勧めによって、曲水の伯父の菅沼修理定知(幻住老人)がかつて暮らしていた庵に滞在した。

ここでの生活の様子や、それまで辿ってきた芭蕉の俳諧道の心境

などを述べたのが『幻住庵記』であり、『奥の細道』とならぶ俳文の傑作とされている。そして、結びにおかれている「先ず頼む椎の木も有り夏木立」の句に詠まれた往時を偲ぶかのように、現在もなお、周辺には椎の木が多く残っている。

また記の中で「谷の清水を汲みてみづから炊く」と述べられている清水も、今もなおこんこんと湧き出ており、芭蕉の想いを伝えているようである。

この庵を出てからもなお、曲水への手紙の中で、もう一度幻住庵を訪れたいと述べているように、芭蕉にとって幻住庵な忘れがたい地であった。



幻住庵(復元)

現在の幻住庵は、芭蕉が生涯の地とした大津を広く紹介する「ふるさと吟遊芭蕉の里事業」により、平成3年9月に新たに建てられたものである。

＜石山寺＞ 石山の 石にたばしる霰かな

俳句は連歌から生まれたが、その連歌の歴史の中で石山寺の果たした役割は大きく、「石山音韻」がよく知られている。芭蕉の句に出てくる石は天然記念物の硅灰石で、石山寺の名前の由来にもなっている。

平安時代には観音霊場として有名になり、貴族女性が多く訪れ、紫式部はここで『源氏物語』の想を練ったといわれる。

＜義仲寺＞ 行く春を 近江の人と 惜しみける

『奥の細道』の長旅から帰った芭蕉は、元禄2年(1689)12月から元禄4年(1691)9月までの長期間大津に滞在したが、その間の仮宿となったのが義仲寺の無名庵と国分山の幻住庵である。

義仲寺は木曾義仲を葬った塚のある処で、木曾塚とも呼ばれたが、この義仲寺や無名庵に暮しながら、芭蕉は湖南の門人に俳句の指導をしていた。芭蕉は元禄7年(1694)10月大坂にて客死したが、その遺骸は義仲寺境内に埋葬されていて、遺言には「ここは東西の巷、漣清き渚なれば、生前の契り深し所なり」と記されている。

「大津市観光振興課パンフレット」より

.....

◇参集地：JR「茨木」駅改札口9時、または、JR「石山」駅改札口9時50分

◇順 路：JR「茨木」9:04⇒「石山」→バス停「幻住庵」～近津尾神社～幻住庵～とくとくの清水～太子堂～(徒歩約2.4km)～石山寺門前(昼食)～石山寺境内散策～バス停「石山寺山門前」→京阪「石山」⇒「膳所」～義仲寺～JR「膳所」⇒「茨木」

◇昼の宴：石山寺門前食事処「湖舟」☎0775-37-0127 名物のシジミ釜飯など(1,800～2,800円)

◇参加費：無料

※会員には、会より1,000円の補助あり。

◇拝観料：石山寺 600円、義仲寺 300円

◇定 員：20名

◇交通費：茨木⇒石山 770円、石山⇒幻住庵 250円、石山寺山門前⇒石山 230円、石山⇒膳所 170円、膳所⇒茨木 680円(合計2,100円)

◇申込先：「街ing いばらき」代表・阪田浩(080-1436-9881) 申込締切り9月30日

Tel&Fax/072-627-3480 E-mail:ibarakisakata@crux.ocn.ne.jp

※本会行事は、自由参加です。不測の事故・傷害などは、自己責任でご対応ください。

「松尾芭蕉」って、如何なる人物！？

1644～1694（正保元年～元禄7年）【俳人】人生を旅とし、旅を俳諧にした。漂泊の俳人。『奥の細道』の著者。伊賀国出身。

津藩に仕えて俳諧を嗜み、北村季吟の指導を受ける。30歳で江戸に出て、才を認められ談林派江戸宗匠となる。それまでの貞門・談林派の言葉遊びの滑稽趣味から離れ、自然や庶民生活の詩情を余韻豊かに表現して、蕉風俳諧を打ち立てる。東北路への旅を始まりに諸国を行脚し、九州を目指す途中に、大坂（大阪）で死去する。『野ざらし紀行』『奥の細道』などの紀行俳文を残す。

『江戸・東京人物辞典』

「松尾芭蕉」の此処が凄い！

◇俳諧を、「サブカルチャー」から「アート」へ

公家社会などで楽しまれていた連歌を、庶民層に至るまで解放して改革・改良したのが俳諧（俳句）です。当初の俳諧には、滑稽さや題材などに一定の規約がありました。それに趣や風流などを組み込んで、俳諧をもっと高尚な文芸にしようとした人たちもいましたが、サブカルチャーの域を超えられませんでした。

芭蕉以前の俳諧は、言葉の上での洒落や可笑しみを主とした貞門風や素材・表現の奇抜さに知的な興味を示した談林風のように遊戯的傾向が強かったのが、芭蕉によってその文芸としての質が一変し、真に芸術的意義を確立するに至りました。

斯くして、芭蕉はこれまでの俳諧の規約に捉われない全く新しい形式（蕉風）で、俳諧を芸術にまで高めたのでした。

◇長旅の「パトロン」は、一体誰！

芭蕉は、旅をしながら多くの句を詠んだことで知られています。旅先では、多くの人々の「おもてなし」を受けました。実は、芭蕉の旅の資金源がはっきりしていず、此処から、芭蕉の旅の資金源の出どころは幕府で、「諸国行脚の旅は、隠密行動だったのでは？」という説が生れたのでした。

◇その「健脚」振りには、誰しもビックリ！

『奥の細道』の総移動距離は何と2,400㌾もあり、そして、一日の平均歩行距離は凡そ50㌾でした。現代人に比して江戸期の人々は健脚でしたが、40㌾（女は35㌾）／日ほどでした。しかも、芭蕉の年齢は45歳！当時の平均寿命が精々50歳ですから、芭蕉翁と呼ばれるくらいのかたのご老体です。

年齢を超越したこの強靱さ、そして幾度も旅に出る身軽さなどから、「松尾芭蕉は、忍者だったのでは？」という疑惑さえもあります。しかも、芭蕉の生誕地は忍者の里・伊賀上野なのですから、あながち見間違いともいえません。。

◇先達（西行・宗祇など）に育り、「旅に生き、旅に死す！」

芭蕉終焉の地は、大坂（大阪）です。旅の途中に当地で弟子たちに看取られながら51歳の一生でした。死の4日前に「旅に病んで夢は枯野を駆け巡る」と詠みました。病が治れば、九州へ渡る予定でした。最後の最後まで、旅をし続けていたのでした。

正しく、「月日は百代の過客にして 行き交う年もまた旅人なり」の人生でした。



芭蕉翁の肖像画（与謝蕪村作）



紫式部ってどんな人？

南野 利江

来年のNHK大河ドラマは「光る君へ」に決まりました。紫式部ってどんな女性だったのでしょうか。紫式部は中流官吏の家庭に生まれました。父親は、子女の教育には熱心で、漢学なども容赦なく仕込みました。彼女は学問好きでしたが才気縦横というのではなく、陰気で、それでいて気位の高い娘でした。

人並みに恋愛もしましたが男に甘えるというより相手をやり込めたり問い詰めたりするものですから男は面倒になり、遠ざかっていきました。この利口で生意気な女にも30歳になって初めて人並みの結婚生活が訪れます。50才近い中年男で、妻子ある藤原の宣孝が彼女に興味を持ち求婚します。(多妻は当時の風習)最初は断りましたが男の執拗さに根負けして妻となりました。豪放磊落な男だったようです。その結婚は、宣孝の急死によりわずか3年足らずで終わってしまいます。その夫との間にできた娘が大式三位(だいにのさんみ)本名 藤原賢子です。「有馬山 猪名の笹原 風吹けばいでそよ人を 忘れやはする」(百人一首)の作者です。娘は内気な母とは対照的に、快活で誰からも愛される人柄だったそうです。

夫の死後 彼女は 父親から聞いた話をもとに源氏物語の初稿を書き始めます。その後、時の権力者 関白道長に才気を認められ、娘の中宮彰子の家庭教師として雇われます。彼女の宮廷生活はそこから始まります。宮廷の女房でありながら華やかさはなく、気の利いたサロン的な会話も得意ではなく、話かけるのも遠慮されるような女性でした。しかも 絶えず休暇を取って「源氏物語」の原稿を書きつないでいきました。日ごろ見聞きする 宮中の人たちの身辺秘事を なに食わぬ顔で 物語のヴェールをかけながら綴っていました。普段無口な彼女に似合わず 小説の中では澁刺とした筆使いが見られます。その小説は一卷が完成するごとに、回し読みされ、また筆写され評判が広がっていきました。

彼女の書き上げた「源氏物語」は 平安時代の宮中の様子を生き生きと
今に伝えています。 中村真一郎「源氏物語の世界」より





気楽に「老い」を楽しむコツ

杉田 宗三

雑記

厚生労働省が 2022 年 7 月に発表した日本人の平均寿命は、男性が 81.47 歳、女性は 87.57 歳。「人生 100 年時代」が誰しにも訪れる高齢化社会の中、気楽に「老い」を楽しむコツを『90 歳の幸福論』（扶桑社）より、一部抜粋・再構成してお届けします。

◆ カラオケで幸せな老後をつくる

脳を元気にするためには、刺激的なアウトプットを心がけることが大切です。

会話を楽しむ人は、認知症の進行が遅いように思います。

歌うことも効果があり、声楽や詩吟を楽しむ人は、認知症が進みづらい。

◆ メモの習慣で認知症を予防

日頃から導入してほしいのがメモを取る習慣です。メモに取るという行為は、新しいことを覚える脳の機能を強化する役割も果たします。

◆ 若い異性との接点をつくろう

意欲を保ち続ける上で大切なのが、男性ホルモンの存在です。

男性ホルモンは、男性のみならず、女性にも分泌されるホルモンです。女性の場合は、閉経後に男性ホルモンが増えていきます。

男性ホルモンを高めるのに、最も手っ取り早いのが性的な関心です。



◆ 「若づくり」はできるだけしたほうがいい

男性医学の父と呼ばれる故・熊本悦明先生は 92 歳で亡くなるまで、ずっと若々しいままでした。その若さの秘訣のひとつが、男性ホルモン注射です。

また、「若々しくいたい」という気持ちを強く持つことこそが、最大の秘訣です。

◆ 毎日の変化が老化を防ぐ第一歩

日々の生活にちょっとした変化が生まれると、やる気を司る脳の部位・前頭葉が刺激されて、意欲が湧きます。

散歩をするなら歩くルートや時間帯を変えてみる。買い物なら行く店をローテーションで変えてみる。料理するなら普段は作ったことがない料理に挑戦してみる。など

◆ 「笑顔」と「謙虚さ」で愛されるお年寄りに

ひとつは、「明るく笑顔が絶えない人」。もうひとつは、「偉そうにしない人」です。

（集英社オンライン オピニオン 2023-7-2 より抜粋・編集）

次回のイベント

街歩き 10月20日(金) 京都迎賓館周辺 詳細は未定

—— 次回『街ing いばらき』例会のご案内 ——

日 時： 令和5年9月7日(木) 14:00～16:00

場 所： 川本本店 茶論「縁」 (サロン「えん」)

住所：茨木市上泉町6-29 TEL：072-624-5552

- 内 容：
1. 10月20日(金)の京都迎賓館
 2. 11月29日(水)の石山寺
 3. 10月5日(木)の外部者との懇談会 他

『街ing いばらき』とは？

茨木のまちづくりを考える市民グループです。といってもあまり硬いことではなく、月一回の例会や年5回程度の街歩きを行っています。

参加資格は問いません。入会に関心のある方は、お問い合わせください。

とりあえずのご見学や、イベントの単発参加も歓迎します。

入会金 1,000円 会費 年間2,000円(一か月170円)



« 編集後記 »

- 4ページに紅葉狩りの案内を掲載しています。11月下旬は石山寺の紅葉が見ごろです。昼食の「湖舟こしゅう」は滋賀の有名店。「シジミ釜めし」が特に人気です。ぜひご参加ください。
- 10月20日(金)の京都迎賓館周辺散策は、迎賓館の見学予約が9月からになりますので、当日の日程が決まっています。見学不可の可能性もありますが、その場合でもコースを変更して実施します。こちらもぜひご参加を。

« 編集・発行 »

阪田 浩 〒567-0881 茨木市上中条一丁目10-22

Tel/Fax 072-627-3480 e-mail: ibarakisakata@crux.ocn.ne.jp

街ing ホームページ : <http://www.machiing-ibaraki.com/>

ホームページは杉田さんが作成されています。ときどきはのぞいてみてください。

2023年8月現在での訪問者は10,010 <前月比20の増加> となっています。

